

# 「人文学の伝統」と文芸学部

井面信行

## 序

現在、日本の大学には様々の教育改革が求められている。その方向性が、中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」に沿っていることも周知のことである。私たち教員には、教育・研究・学内外の活動に関する自己点検・評価、シラバスの記述内容の充実、ピアレビューによる授業方法の改善、学生の授業アンケートに対するリフレクション・ペーパーの作成等々、いわゆるFD活動の展開が義務として求められている。教員は、戸惑いつつも時代の流れとして受け入れ、FD活動に受動的に付き従っているという感が否めない。

もとより、FD活動の意味や価値を否定することはできない。あらゆる活動領域において進歩、発展を追究するのが人間

の常であるならば、FDの内容についての妥当性の問題は常に開かれたままであるとしても、教育の現場においてもそれが展開されないはずはないからである。しかしながら、現実の問題として、多くの教員は様々の教育改革さらには学部運営、大学運営への対応に追われ、教員としての本来の場である教育・研究の領域において何をなすべきか、それをじっくりと考える余裕がなくなっていることを実感しているに違いない。

近畿大学文芸学部という教育・研究の場において、私たちは何をなすべきか。FD活動を展開することと並行して、この問題を改めて考えておく必要がある。そのためには原点に戻る。ことが有効であろう。近畿大学文芸学部はどのような理念の下に創設されたのであるか、そのことを再確認することにしよう<sup>2)</sup>。

## 一 「文芸学部」における「文芸」の意味

「文芸学部」という名称の学部を持つ大学は日本ではごくわずかである。日本語の「文芸」には二つの意味がある。一般的に理解されているのは、「文学 literature」とほぼ同義とみなされる意味であろう。「文芸雑誌」とは文学作品を掲載した雑誌であると多くの人が理解しているにちがいない。もうひとつは学問と芸術を統合した「学芸」に相応する意味である。

「学芸」とは、しかし、英語の liberal arts に対応する概念である。今日では、一般に「一般教養科目」と訳される liberal arts は、ヨーロッパ中世に組織的に整備された学問体系である artes liberales にその起源がある。周知のことに属するが、ヨーロッパ中世における artes liberales は、古典古代においてテクネー techné の名の下に、未分化のままひと括りにされてきた極めて広い意味での「技術」から、精神的活動の意味合いの強い分野が「自由学芸 artes liberales」として分化して成立したものである。そして、ここには一般に、論理学、修辭学、文法の文系三科目と、代数学、幾何学、天文学、音楽の理系四科目の計七科目が属することになった。それとは逆に肉体的労働の意味合いの強いテクネーは、「機械技術 artes mechanicae」として「自由学芸」より価値の劣るものとみなされ、大学の教育科目には取り入れられなかった。その中には建築、絵画、彫刻など、今日「芸術」と呼ばれる領域、さらには遠く近代の科

学技術へとつながる諸技術が含まれていたのである。

しかしながら、中世の「自由学芸 artes liberales」は、今日の大学における「一般教養科目」としての liberal arts と一直接に繋がっているのではない、と言わなければならない。その間にひとつの思想・運動が介在し、両者を媒介しなければならなかった。それがルネサンスの「人文主義 humanism」である。

「文芸学部」の「文芸」の言葉がルネサンスの「人文主義 humanism」に由来するものであることが、すでに明記されている。すなわち、平成十九年、大学基準協会に提出された近畿大学評価報告書において、文芸学部の「理念」の章に次のように記されている。

学部創設にあたって「文芸」と命名したことは、ルネサンスを「文芸復興」と訳すごとく、学問、文学、芸術を狭い領域で捉えず総合的な視野と実践で活性化していくことを意味するものであった……

「ルネサンス」を「文芸復興」と訳す場合の「文芸」とは、もとより文学の意味ではなく、ルネサンスの人文主義を通過したのちの「学芸」に通じるものであるということができる。したがって、文芸学部の「文芸」とは、単なる「教養 liberal arts」を指し示すわけでも、学問と芸術の単純な並存を意味するわけでもない。そこには「人文主義」もしくは「人文学」の実践という意味が込められていることを、まず認識しなければ

ならないと思われる。

以下、「学問、文学、芸術を狭い領域で捉えず総合的な視野と実践で活性化していくこと」の根拠を、少し歴史をさかのぼって追究することにする。

## 二 ヒューマンイズム 人文主義と啓蒙主義

アーウィン・パノフスキー (Erwin Panofsky, 1892-1968) は、論文「人文学としての美術史」の中で、死期に近づいたカントが医師の訪問を受けたときに示した態度について、次のように報告している。

死の九日前、イマヌエル・カントは主治医の訪問をうけた。年若い病んで、目もほとんど見えなくなっていた彼は、椅子から立ちあがって、衰弱のために身を震わせ、何か意味の取れない言葉をつぶやきながら立ったままでいた。とうとう彼の忠実な付添いが、訪問者が腰をおろすまでは自分も坐らないと言っていることに気付いた。医師がその通りにすると、ようやくカントは介助されて椅子に座りなおし、少し体の力を取り戻してから、こう言った。「Das Gefühl für Humanität hat mich noch nicht verlassen. 人間性への感受性はまだ私から失われてはいません。」居合わせた二人はほとんど涙するばかりに心を動かされた。なぜなら、「人間性 Humanität」という言葉は、十八世紀当時にはまだ礼儀正しさとか丁寧さとかいった以上の

意味をもっていなかったが、カントにとつてははるかに深い意味をもっており、その場の状況がそのことを強く印象づける役割を果たしたからである。すなわち、それは、人間自らが是認し、自らが課した原理を誇り高く、かつ悲壮な決意で意識することであり、病と老いに、そして「死を免れぬもの mortality」という言葉に含まれるあらゆるものに無条件に服従してしまうこととは正反対のことだったのである。<sup>4</sup>

このエピソードを紹介した後で、パノフスキーは「人間性 humanitas」という概念の意味について、それが歴史的に「価値としての意味」と「限界としての意味」に区別されることを指摘している。「価値としての人間性」という概念は、人間を動物から区別する指標であるだけでなく、敬虔さや教育を欠いた俗物から、道徳的価値と「教養 culture」という言葉で言い表せる学識を備えた「教養人 homo humanus」を区別する性質を意味している。一方、「限界としての意味」は、人間性を神性と対比させることによって顕わになる人間の特質のことであり、ここには「か弱き人間性 humanitas fragilis」とか「はかなき人間性 humanitas caduca」といった「死を免れぬもの mortality」と結びつく人間の性質が結びつくことになる。

パノフスキーによれば、「人間性 humanitas」の概念は、ルネサンス時代からこの二つの様相すなわち自律的であると同時に限界を持つ存在としての人間という意味を含んでおり、

「人文主義」は「人間性」のこの両義的概念から生まれてきたものである。そして「人文主義」について、彼は次のように説明する。

それはひとつの運動であるよりは、むしろ、人間の価値（理性と自由）を主張することと人間の限界（過ちやすさと弱さ）を受け入れることの両方に基づいて、人間の尊厳を確信するひとつの態度であると定義することができる。<sup>5</sup>

死に際してのカントの振る舞いは、理性と自由をもちつつも死から逃れられない人間が、その最期に自らの尊厳を示したものであり、それはまさしく人文主義を體現したものであった、とパノフスキーは考えるのである。

パノフスキーが人文主義あるいは人文文学の具体的状況を示す例として取り上げたカントを巡るエピソードには、私たちが人文主義あるいは人文文学の展開を近代の文脈の中で跡付ける作業を試みる際にヒントとなる、ひとつの重要な示唆が含まれている。というのは、ルネサンスに源を持つ人文文学の伝統が、カントを結節点として啓蒙主義の進行の中で徐々に薄れていったと考えられるからである。少々乱暴な言い方をすれば、カントは人文主義ないし人文文学の正当な伝統を保持していた最後の人物であったと言うことができるのである。

それゆえ、ここで議論の焦点を啓蒙主義と啓蒙主義批判に移

すことにしよう。

十八世紀の啓蒙主義は、一般に近代の始まりであるとみなされる。その理由は、この時代が「理性」の時代だからである。すなわち、一般的に言って、啓蒙思想は、非合理的・神秘的な思考方法や宗教的因習あるいは呪術などに支配された民衆を理性に照らして啓発し、合理的思考法に基づく科学的知識や批判的精神を人々に訓育して、人間の尊厳を自覚させようとするものであった。つまり、啓蒙のプロセスは、文明化、進歩、呪術からの解放、神話的思考から合理的思考への転換を意味することになる。カントの批判哲学もまた、ここに算入されることになる。

その結果、啓蒙思想は、理性の力を原動力にして近代科学の基礎を作り、近代資本主義の発達を促すことによって、人類の歴史にバラ色の未来を約束してくれるものと信じられるようになった。すなわち、啓蒙主義を通して、理性の力による人類の無限の進歩を信じる楽天的な進歩史観が生み出されたのであった。

私たち現代人は、たいいていの場合、日常生活において意識的にせよ無意識的にせよ、この啓蒙理性の力を信じ、それに基づいて世界を認識しているといえる。例えば、今日私たちの多くは、人間の認識や行動を律する原理を非合理的な宗教的権威や信仰にはなく理性の自由な働きに求め、すべての人間の自由と平等の前提の下で現世における幸福を追究し、人間を超えるものの存在を否定して自然／宇宙は物理学の法則に従って無目

的に運動していると考えている、と言つてよいであろう。

このようにして、啓蒙理性は、人間にとつて世界を認識するための絶対的な武器となり、もつとも信頼するべき能力とみなされてきたのであった。

しかしながら、問題は、この一見絶対的権能を持っていると思われた理性に対して、とりわけ二十世紀において強い危機意識が生じてきたことである。マックス・ウェーバー、ベルグソン、フッサール、ホルクハイマーなどは理性主義に対する危機意識をいち早く表明した思想家であった。とりわけホルクハイマー (Max Horkheimer, 1895-1973) の思想はもつとも先鋭的かつたで啓蒙批判を展開したものであると言えるであろう。

ホルクハイマーは、『啓蒙の弁証法』の冒頭で次のように述べている。

古来、進歩的思想という、もつとも広い意味での啓蒙が追求してきた目標は、人間から恐怖を取り除き、人間を支配者の地位につけるといふことであつた。しかるに、余すところなく啓蒙された地表は、今、勝ち誇つた凶兆に輝いている。啓蒙のプログラムは、世界を呪術から開放することであつた。神話を解体し、知識によつて空想の権威を失墜させることこそ、啓蒙の意図したことであつた。<sup>6</sup>

ホルクハイマーの批判的眼差しは、啓蒙(理性化≡文明化)がこのような野蠻や呪術からの解放、神話の解体、自然支配を

遂行する一方で、人間疎外、非合理、戦争といった新たな野蠻へと転落していくことに鋭く向けられる。ファシズムという新しい野蠻状態は、ヒトラーの死とともに打ち破られたものの、民主主義と人道主義は完成されることはなく、再び新たな野蠻状態が出現するという不安にさらされている、とホルクハイマーは考える。『理性の腐蝕』では次のように述べられている。

人類の希望は、初めてそれがヒューマニズムによつて語られた手探りの時代よりも、その成就からかけ離れているように見える。技術的知識が人間の思惟や活動の地平を拡大するにつれ、個人としての人間の自立性、巨大化する大衆操作の装置に反抗する能力、想像力、独立的判断といったものは衰微していくように思われる。啓蒙のための技術的手段の進歩は、非人間化の過程を伴なっている。かくて、進歩は、まさに実現が目差されている当の目標、人間の観念を破壊する。<sup>7</sup>

つまり、理性の名において展開してきた進歩的技術的合理化が、逆にこの理性を担う実体である人間を抹殺する方向に、すなわち人間疎外を引き起こす状況に向かつているのである。ホルクハイマーは、このような状況を理性の道具化、理性の腐蝕として捉える。

ヨーロッパの哲学体系においては、理性は、人間精神の主観的機能であるだけでなく、自然とその現象、人間相互の関

係、社会制度などのうちにも存在する客観的な原理とみなされてきた。ホルクハイマーはこれを「客観的理性」と名づける。客観的理性は、個人の願望や利害関心をどのような手段を用いて達成するかに向かうのではなく、人間の包括的体系や客観的秩序を把握する能力である。そこで重要なのは手段ではなく目的であり、人間の運命の問題や究極目的を実現するための方法に関する問題に最大の関心が払われたのであった。

しかしながら、近代において、理性は自己の客観的内容を放棄し、物の見方に重大な変化が生じてきた、とホルクハイマーは考える。そして、この傾向を理性の主観化・形式化とみなし、そのような理性を「主観的理性」と名づける。主観的理性は、正義、平等、幸福、寛容といった生活の指導原理を決定する能力としての役目を放棄し、主観的な利害関心の下で、単に思考する抽象的機能として捉えられる。言い換えれば、それは、本質的に、目的に対する手段の妥当性に関心をもつだけであつて、その目的自体の妥当性には関心を払わないのである。こうして理性は自律性を持たない、目的のための単なる道具の地位に転落する。したがって、主観的理性は同時に道具的理性でもあることになる。

啓蒙理性が宗教的もしくは形而上学的世界観を破壊してしまつた—それはH・ゼーデルマイヤの言葉を借りれば、「中心の喪失」であり、ガダマーによれば「神話の喪失」である—のち、理性の主観化、道具化は、中心を失つた近代人に新しい

拠り所として啓蒙理性に基づく自然科学を与えることになつた。そして、科学的合理的思考が確立されて以来、自然科学の方法が唯一真理を獲得できる道筋であつて、それ以外の人間の文化的営みは、なんら客観的根拠をもたない主観的信念や臆見の表明に過ぎないという考え方が世界を覆い始めたのである。すなわち、倫理的・道徳的決断のような人間にとつて重みのある判断でさえ各人の選択や好みの問題であり、「真理」からは切り離されていると考えられるようになったのである。

このようにして、近代において、理性はある目的を効率的に達成するための装置ないし機能にすぎないことになつてしまつた。そして、この道具化された理性は、批判を受けないまま、かつての呪術や神話のように新たな盲目的崇拜の対象となり、大衆や世論を容易に操作しうる力を持つようになる。それは、大衆の衆愚化であり、神話や迷信の復活である、とホルクハイマーは主張するのである。

### 三、人文学の伝統—H・G・ガダマーの啓蒙理性批判

啓蒙主義が進展する中で、道徳性や教養を具えた「人間性」への希求、また併せて人間の尊厳についての觀念が希薄になつていったことへの危機感—啓蒙主義批判には一貫してこの状況への危機感が貫かれているように思われる。宗教的・倫理的意味を欠いた営利的文化活動の末期には「精神のない専門人、心

情のない享楽人」が現れるだろうというマックス・ウェーバーの予言めいた言葉は、その状況を端的に表している。<sup>10</sup>

この危機感を、人文主義の伝統を探究し、精神科学による真理把握の可能性を示すことよって克服しようとしたのが、H・G・ガダマー (Hans-Georg Gadamer, 1900-2002) であった。そして、彼の名著『真理と方法』<sup>11</sup>も、近代の啓蒙理性への批判から議論が始まるのである。

ガダマーもまた、啓蒙思想の確立以降、科学的合理的の方法が唯一真理認識を達成できる方法であるという理性主義に危機感を表明する。もともと、このような啓蒙理性一辺倒の思想に対して、十九世紀以降、たとえばデイルタイのような人によって、自然科学とは異なる精神科学を、新たな学問として基礎付けようとする試みがなされてきた<sup>12</sup>。しかし、デイルタイの試みは、自然科学をモデルにして精神科学を客観的な学問・科学に仕立て上げようとしたものであった。その結果、精神科学が獲得する真理の問題を見失った、とガダマーは批判する。

重要なことは、自然科学のみが真理を与えるのではなく、精神科学も人文科学もまた、独自の真理を打ち立てるということをはっきりと認識することである。たとえば、ガダマーによれば、芸術は、単なる主観的趣味や気まぐれの産物ではなく、人間の世界の「真理」の結実であり、「真理」認識の場である。人間の営為の所産のすべては、「真理」を内に含んでいる。私たちは、それらの所産に対して絶えず厳しい批判的吟味

を加え、人間的世界経験の地平を拡大していかなければならぬ。ガダマーの名著『真理と方法』の主題は、自然科学的方法によつては捉えることのできない真理が、精神科学的認識に固有の理解という現象の中で、いかにして自己自身を告知するかという問題の解明であった。そして、それを遂行するための道が、ガダマーの言う「解釈学」なのである。

『真理と方法』第一部には、「芸術の経験を手がかりとした真理問題の発掘」という表題つけられている。ガダマーは、哲学の経験、歴史の経験と並んで、芸術の経験をそこで真理が告知される理解現象のひとつに数えている。端的にいえば、芸術は純粹知覚の対象、美的対象ではなく、理解されるべきもの、解釈されるべきものである。そして、解釈的経験の真理性を解明するため、その最初の手がかりとして選ばれたのが芸術だったのである。

ガダマーによれば、精神科学的研究を支えてきたのは、十九世紀の啓蒙理性が想定するような自然科学的方法ではない。そうではなく、精神科学は、人文主義の伝統の中で独自に形成されてきたのであって、いわゆる「方法」<sup>13</sup>の中で基礎付けられるものではない。こうしてガダマーは、人文主義の源流を尋ねて、次の四つの概念に注目することになる。すなわち、教養 Bildung、趣味 Geschmack、共通感覚 sensus communis、判断力 Urteilskraft である。

## 1 教養

ガダマーは、「教養」の概念は十八世紀最大の思想であり、十九世紀精神科学に生命を吹き込んだ土壌に他ならないと考える。

教養の概念が、今日の意味において基礎付けられたのは、ヘルダーの「人間への形成 *Bildung zum Menschen*」[上方への形成 *Emporbildung*] という概念が最初であると考えられる。すなわち、このような概念によつて、「教養」とは、単なる造形 *Bildung* ではなく、育成「*Kultur*」という概念と密接に結びついたものとなり、自然によつて与えられた自己の素質や能力を伸ばし、作り上げていく (*ausbildung*) 人間独自の在り方を指し示すようになった。そして、この概念規定は、ヘルダーからカントを経て、ヘーゲルに至つて完成するようになる、とガダマーは考へる。

ヘーゲルに従えば、人間的教養の本質とは、自己を普遍的で精神的な本質存在へと作り上げていくこと、言い換えれば、自己と他者とを媒介して高次の自己を完成する精神のあり方である。逆にいえば、普遍を見ることなく、特殊なもの、部分的なもの、具体的なものに身をゆだねて、自制心もなく怒りに身を委ねてしまうような者は教養がないということになる。そのような人は、抽象能力が欠如しており、普遍的なものを視野に入れることが出来ないのである。したがつて、普遍性へと自らを高めるものとしての教養は、一つの人間的課題となる。つまり、

教養は、精神の活動の場となるのである。<sup>14</sup>

教養には、自分自身に対する節度と距離をわきまえる普遍的な感覚がある。すなわち、自分の私的な目的を距離を保つて見ることであり、それは他人の眼で見ることを意味している。その限りで、教養には、普遍的感觉 (*allgemeiner Sinn*) の性質が備わっている。この点に、教養と共通感覚 (*sensus communis*) との接点がある。

## 2 共通感覚

ガダマーは、ジャンパッティスタ・ヴィーコ (*Giambattista Vico* 1686-1744) を取り上げ、彼が、共通感覚に重要な意義を認めたことを指摘する。ヴィーコは、合理主義、啓蒙主義の始祖とも目されるデカルトの方法論に対し、全面的批判を展開した思想家である<sup>15</sup>。ヴィーコによれば、人間の意志に方向性を与えるのは、理性という抽象的一般性ではなく、全人類における共通性をもたらししている具体的一般性つまり共通感覚である。共通感覚が与えるものは、論証に基づく筋の通つた知ではないが、直感的に「正しいもの」を発見させてくれるものである。すなわち、共通感覚は、「正しいもの、共同体の利益」への感覚であり、「人間の道徳的実存」とかわり、それを実現する「実践的知」を涵養するものである。人間は、想像力、記憶力、あるいはセンスを育成するためにこそ、知的批判能力ではなく、共通感覚を磨く必要があるのであり、それは科学的



方法によって置き換えることの出来ない能力なのである。

共通感覚の意義を探求することは、理性による論証だけでは人間の認識の全領域をカバーすることは出来ないことを教えてくれる。それは、逆の見方をすれば、精神科学的認識が、自己の眞理性を主張するに当たって、いかに自らとは本質を異にする近代科学の方法論の中にはまり込んでしまったかを明らかにしてくれるのである。

### 3 判断力

共通感覚の概念は、判断力の概念と密接に結びついていた。両者は共に、人間の基本的道德の問題と関係していたからである。すなわち、人が正しい分類整理ができなかつたり、学んだことを正しく適用することができなかつたりするとき、判断力が欠如しているといわれる。この場合、判断力は、理性に従う論証的能力ではなく、むしろ感性的ないし趣味の性格を持つことになる。つまり、判断力とは、特殊を普遍の下に包摂し、ある事柄を特定の事例として認識する働きであるが、そのような働きは、論理的に実証することは出来ないものであり、ある種の「道德的感覚」として理解されていたのである。

例えば、健全な理性すなわち常識は、正しいか誤りか、為し得てよいか悪いかについて下す判断のなかで示される。ものごとを適切、公正、健全な視点で見るところに健全な判断が下されるのであり、人の弱みを正しく計算して人をだます詐欺師は、

それとしては正しい判断を行うとしても、決して健全であり、道德的であるとはいえない。

それゆえ、判断力とは、その適用に際してどのような一般原理が働いているのかを論理的に明らかに出来ないものであり、ただひとつひとつの事例に即して、常識⇨共通感覚を通して習得されるほかないものである。その意味で、判断力は、感覚と同じような一つの能力なのであり、それそのものとして学習することが出来ないと考えられたのである。

### 4 趣味

趣味という概念は、今日では一般的に「娯楽、楽しみ」の意味か、あるいは「美を判定する能力」の意味で使用される。しかし、趣味の概念もまた、もともとは道德的意味を含んだ概念であったことをガダマーは指摘する。

ガダマーによれば、趣味の概念の歴史は、スペインの作家バルタザール・グラシアン (Balthasar Gracian, 1601-58) に始まる。趣味はもともと味覚のことである (Taste, Gusto, goût)。味覚は、人間の感覚のうちでもっとも動物的なものであるが、グラシアンによれば、そこには既に精神が事物を判定する際におこなう識別の契機が含まれている。すなわち、味覚は動物が生きるために必要な食物の選別を判断する(毒か毒でないか)ための器官であるが、それが同時に楽しみの享受に結びついていくわけである。したがって、味覚⇨趣味についても、美食家

のように、涵養 (culture) というものが存在するのである。

こうして、趣味の涵養は「思慮ある人」の必要条件となり、教養社会を形成する上で重要な役割を果たすことになった。すなわち、「良き趣味」が「良き社会」を形作るのである。したがって、趣味は、私的主観的なものではなく、優れて社会的な意味を担っていたといえる。趣味は常に「良き趣味」であろうとし、それが下す判断は、妥当性を要求する。それにもかかわらず、趣味は感覚のようなものであり、その妥当性は論理的根拠に支えられているわけではないのである。それゆえ、趣味は、美的なものにだけ関わるのではなく、慣習や法に関わり、道徳や礼節の領域全体を包括するものであったといえる。

ガダマーによれば、教養、共通感覚、判断力、趣味は人文主義の伝統に深く根ざした人間の諸能力であった。それにもかかわらず、啓蒙主義の進展とともに、人文主義の基本的要素であったこれら四つの能力が理論的認識に参与することから排除され、自然科学を根拠付ける能力が理論理性にのみ限定されてしまったことよって、精神科学はもはや真理を与えることは出来ず、主観的な観念の表明に過ぎないものとみなされるようになったのである。ガダマーの疑いはここににある。真理は理論理性による認識つまり自然科学による認識によってしか捉えられないのではなく、例えば、芸術作品もまた真理を有することを認めなければならないのかと問うのである。

ガダマーは、精神科学の方法上の独自性を正当化する根拠が失われてしまったことの契機はカント哲学にあると認め、カントの哲学における美学の主観主義化を批判するのであるが、こゝはその議論をする場ではない。最後に、これまでの論述と文芸学部のとおり方とがどのように結びつくのか、それにある程度の見通しをつけなければならぬ。

#### 四 人文学の実践と文芸学部の構成

この小論の目的は、近畿大学という総合大学を構成する諸層の中で、文芸学部はどのような層に位置づけられ、何を教育の目標とするべきであるのかを考えることであつた。これまでにたどってきた二十世紀に展開された啓蒙理性批判やガダマーの「人文学の伝統」についての議論が、この問題にヒントを与えてくれるように思われる。

ガダマーの主張は、教養、共通感覚、判断力、趣味といった人間の能力は人文主義の基本的要素であつたにもかかわらず、理論的認識から排除され、自然科学を根拠付ける能力が理論理性（＝悟性）だけに限定された結果、精神科学による真理認識の問題が見失われてしまったという反省に立ち、人文主義の伝統に由来するこの四つの概念を復権させ、精神科学独自の真理認識の可能性を再構築しようとする点にあつた。

文芸学部の四学科が展開している学問研究が、単に理論理性

による合理的論証にのみ依拠するものではなく、ガグマーが言  
挙する教養、共通感覚、判断力、趣味といった広範な人間の能  
力に根ざすものであることについては、とりわけての異論はな  
いであろう。しかし、その際、この四つの概念が単に人間にア  
プリオリに備わった能力ではなく、実践的な活動の中で培  
われていく能力であること、そして、これらすべてが実践的知  
すなわち道徳的認識にかかわっていること、さらにそこに人間  
性の自覚と人間の尊厳の問題がつかっていることを留意しな  
ければならない。このことが文芸学部における教育の在り方を  
考える際に、ひとつの重要な指標を与えてくれるように思われ  
るからである。

文芸学部の組織・構成はこのような能力の訓育にどのように対  
応しうるであろうか。まず、文芸学部の歴史を振り返り、当初の  
理念とそれに対応するカリキュラムを確認することしよう。

文芸学部設立当時の学部案内パンフレットには次のように記  
されている。

……わが国ではどうか、単独に文学部として従来から存在し  
ています。われわれはここに思いをいたし、文学と芸術全域を、同  
一空間、同一平面上に位置せしめ、血をかよわしめ、各分野が学  
問また感性の上にも、学際的にも、交響し合うことにより、新し  
未知の無限の広野が出現せられる、その可能性実現をしきりに思い  
また願いました。これが、近畿大学文芸学部の設立を決定した大ま

な理由であります。<sup>16</sup>

また、文芸学部設立の中心力であった故世耕政隆総長・理  
事長（当時）が、文芸学部紀要『文学・芸術・文化』創刊号に  
寄せた言葉には、次のように述べられている。

あらたに、「文学・芸術・文化」の名称のもとに発行される雑誌は、  
即物的で、およぼすところは深く広く、この三者は、集合体をなし  
たかとおもうと、たちどころに連結、融合体となり、やがて一体と  
なる可能性を充分はらんでいるかと思われます。…（略）…意識と  
存在の存する限り、その不安、崩壊、分裂、構築等のくり返しを、  
また混沌の中をくぐり往來する。それゆえに、この三者融合の分野  
には、いのちが宿されている。生命の発する声、そのき裂からのさ  
げび、ここにはたしかにそれがある。また、生活、思念、知恵、情  
念、生理的必然としての噴出やむなきものの軌跡歴然とあろうかと  
思います。それ等はあきらかに、生命の反映であり、他の分野より  
も、より深く強いられる生命の呼吸する根源に触れる何物かを思わ  
せるものでしょうか。昨年発足した本学文芸学部とこの雑誌は、軌  
を一つにし、ともにおなじ宿運をたどるかと思ひます。その命のあ  
かし、かぎりなく旺んらんことを念ずるものです。<sup>17</sup>

さらに、設立の十年前に文芸学部の構想について次のような  
記述があったことが報告されている。

各学部の根源であるべき文芸学部の創設が達成されるならば、近畿大学は完全な総合大学として、内外を問わずその評価は尚一層輝かしいものとなるであろう。(略) ;ともすれば今日、物質的繁栄の中で、また画一化、規格化という嵐の中で、世相は誠に軽薄にして汚濁と混迷を続け、入々は能率やスピードに眼を奪われ、己れの内面の深淵を凝視することを忘却せんとしている。かかる危機的時代に直面して、いま最も必要とされているものは、人間と自然・機械・社会との関係を改めて検討し、よって自己自身の精神のありようを全体的かつ静かに問うことではなからうか。実利的な学部に加えて、文芸学部の創設が望まれる所以である。<sup>18</sup>

このような設立理念に対応する文芸学部創設時のカリキュラムはどのようなものであったのか。文芸学部創設十周年を記念して編まれた「文芸学部の10年」には次のように述べられている。

文芸学部創設時の「学部案内」では、(表現)を文学芸術全域のキーワードとし、それを四つのカテゴリーに分けて、文芸学部が求めるべき理念を構想している。すなわち、

- a 詩歌、音楽—韻律・律動的なもの—時間的表現。
- b 絵画、彫刻、デザイン—ある形態をもたらず。空間的表現。
- c 言語思想を主とするもの—時間・空間の交錯した表現—文芸全般、物語、文芸批評等。

d a-cのすべての要素を総合的に表現したものの演劇。  
創設時のカリキュラムは、このような構想に対応するべきものであった。<sup>19</sup>

どの記述からも共通して読み取れることは、すべての学科(設立当初は三学科であった)が互いに結びあつて、学部全体として人間の営為の意味と価値を総合的体系的に探究することが目指されている、という点である。そのために構成されたカリキュラムは、必修科目・選択必修科目に関してはシンプルであり、また関連科目として他学科の科目群が設定されていることによつて学部全体としての総合教育に過不足なく対応するものとなつている。建築の比喩を使えば、このカリキュラムは諸要素を包括的に含んだ平屋—モンゴルの遊牧民の住居ゲルのような—の構造を持つている。

しかしながら、平成六年、大学院の設置に合わせて新しいカリキュラムが導入された。その理由は「創設時のカリキュラムの不備を是正」し、「各学科・専攻の実情に合わせて専門科目の充実を図る」<sup>20</sup>ためであった。その後も、各学科・専攻における「コース」の設置、平成十三年の教養部改編に伴うカリキュラム変更、さらには平成二十年の「英語多文化コミュニケーション学科」の設置、文学科の「外国語外国文学専攻」の設置など、文芸学部は様々の改組を行い、専門教育の質を高めてきた。

これらの改組・改編に関しては、設立当初の理念から外れた

動きだという批判もある<sup>2)</sup>。確かに、文芸学部設立当初の理念が「教養人、文化人」の育成を目差すべきことを謳っている点は、ガダマーの言う人文学の伝統に根ざす四つの能力を訓育することに文芸学部の教育目標を見ようとする筆者の考えと齟齬するものではない。しかしながら、真の教養Bildungは過不足のない平均的な教育から育たないであろう。大学はギムナジウムの基礎教育を行う場ではなく、少なくとも専門領域の深みをもつて見ることでできる間にまで学生を導かなければならない。そのためには、「各学科・専攻の実情に合わせて専門科目の充実を図る」ことは高等教育機関としての大学の常なる課題でもあると言える。教養、共通感覚、判断力、趣味の四つの能力の涵養と育成は、それ自体のための教育ではなく、すべて専門教育を通して間接的に、あるいはいつの間にか知らず知らず達成されるものであろう。けれども、それぞれの専門教育は高まれば高まるほど互いに遠く離れていくことを常とする。それゆえ、四つの学科を引き結び作用が働かなければならない。再び建築に擬えて言えば、それぞれが高くそびえる専門的研究という高層建築を横に架橋する構造―梅田スカイビルのような構造が必要なのではないか。梅田スカイビルの設計者原広司は、高層建築という垂直の袋小路を空中でつなく（空中庭園）ことよって、互いに分離した建築物を結合し、両者に有機的関係を打ち立てることを目差したのである。しかし、文芸学部の教育において、そのことはどのようにすれば達成できるのか。

あろうか。

二つの見通しがある。ひとつは学部内での実践的教育活動、もうひとつは学部外もしくは学外でのそれである。

前者については、すでに「文芸フェスタ」においてその実行が見られる。今年度の「文芸フェスタ」では、すべての学科の教員・学生が参加し、ひとつのテーマ（平成二十一年度のテーマは「夢学へー」）の下にシンポジウム、講演と討論会、美術展覧会等が展開された。オランダのライデン大学では、毎年学部全体で共通の研究テーマを掲げ、すべての教員が自分の授業で一回はそのテーマについての話をするようになっていっていると聞く。また、その際、図書館も協力してそのテーマに関連した図書を特別に集め、開架にすることである。「文芸フェスタ」はそれと比較すれば、まだ助走段階である。教員・学生のいっそこの協力によってより大きく展開すれば、豊かな空中庭園を構築することができるのではないかと。

もうひとつは、学部外もしくは学外の諸機関との連携によって、カリキュラムの枠を超える実践的活動を展開することである。大学が「象牙の塔」と呼ばれた時代は遠くに去った。「象牙の塔」が現実社会と没交渉の学究状態を意味するとすれば、そこで展開されているのは―アリストテレスに従えば―純粹に知を探究する学（エピステマー）であろう。学は普遍的必然的なものを論証によって知る力であり、いきおい内省的態度に陥る。しかしながら、アリストテレスは、真理認識を可能にす

る人間の能力について、さらに技術（テクネー）と知慮（フロネーシス）をあげている。技術は、制作者の内にある真理をどのようにすれば制作によって生成させることができるかについての知である。また、知慮とは、「人間にとつての諸般の善と悪に關しての、ことわりを具えて真を失わない実践可能な状態」である<sup>20</sup>。端的に言えば、善と悪に關して経験的に対処することのできる実践知だということになる。それゆえ、もはや「象牙の塔」ではない大学において、学に加えて必要なものが技術と実践知であるとすれば、大学の外に向けての実践的行動が重要な意味を持つことになるであろう。それは静観と内省ではなく、世界の動きと共に動くことよって考えることである。すでに文芸学部においていくつかの試みがなされている。

例えば、英語多文化コミュニケーション学科の前身である、かつての言語コミュニケーションコースでは、二〇〇七年に大阪で開催された世界陸上競技会にボランティア通訳として学生を派遣した。試験と面接に合格した学生は、外国メディアに対して競技の予定、変更、結果などの詳細な情報を配信する仕事に従事した。加えて、選手の誘導や観光案内など、外国選手への様々な対応にも当たったということである。その実践的経験が英語によるコミュニケーションにおいてのならず、生きることにおいても大きな自信になったことをある学生が述懐しているとの報告がなされている。

また文化学科・現代文化コースのあるゼミでは、授業の一

環として湖西の棚田でコメ作りを実践している。空き農地の「オーナー制」を活用した試みであり、田植え・草刈・稲刈りはさがけ（刈った稲を天日干しする作業）を基本的に手作業で行うという。そこには「食と農」の問題への見通しが立てられ、学生たちの研究成果に結びついているだけではなく、学生が地域の人々と交流の輪を広げていくという点でもひとつ成果が得られているとのことである<sup>21</sup>。

確かに、学外での実践的活動それ自体は、互いに自立した四学科を直接につなぐものではないかもしれない。しかしながら、教員、学生が共に大学という枠を超えて実践的に社会と交わる経験を積み重ねれば、市民的公共圏（J・ハーバース）におけるコミュニケーション能力を涵養することに資することになり、結果的に学部に対して社会に關する共通の理解、了解をもたらすことになるのでないであろうか。

いずれにしても、世界は時代の変化として動き、空間としても地域と社会の変貌と共に動く。動きの中で普遍を求めること——中島みゆきの「世情」の歌詞が浮かぶ——、絶えず発展、展開するそれぞれの学問領域の中で、人間性の基盤としての教養、共通感覚、判断力、趣味を訓育し、人間の尊厳を自覚すること——文芸学部の教育はその点に収斂するべきであると思う。

1 参照。井面信行「「学士課程教育の構築に向けて」概観」、近畿大学文芸学部論集「文学・芸術・文化」第21巻第1号、

2009年

- 2 平成元年の文芸学部創設以来の教員はすでに少数となり、文芸学部の設立理念を知る教員は少なくなってしまう。これを機会に再認識されることになれば幸いである。
- 3 成城大学、共立女子大学に「文芸学部」が設置されている。
- 4 Erwin Panofsky, *The History of Art as a Human Discipline, in Meaning in the Visual Arts*. The Univ. of Chicago Press, 1982, p.1ff.
- 5 op.cit.p.2
- 6 マックス・ホルクハイマー、テオドル・W・アドルノ『啓蒙の弁証法』徳永恂訳、岩波書店、一九九〇年、3頁
- 7 マックス・ホルクハイマー『理性の腐蝕』山口祐弘訳、せりか書房、一九七〇年、2頁。
- 8 参照。Hans Sedlmayr: *Verlust der Mitten*. 1948. 邦訳、『中心の喪失』石川公一・阿部公正訳、1965年、美術出版社
- 9 ガタマーについては後出。
- 10 マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫、一九八九年、三六六頁。
- 11 Hans -Georg Gadamer, *Wahrheit und Methode: in Gesamelte Werke Bd.1*. Tübingen, 1986
- 12 参照。ティルタイ『精神化学序説』上・下巻、山本英一、上田誠訳、似文社、一九七九年。
- 13 『真理と方法』の「方法」とは、近代合理主義による科学

的方法もしくは啓蒙理性的方法のことを指し示している。

- 14 参照。ヘーゲル『哲学入門』武市健人訳、岩波文庫、昭和二十七年、九六頁以下。
- 15 参照。ジャンバットイスタ・ヴィーコ『学問の方法』上村忠男・佐々木力訳、岩波文庫、一九八七年。
- 16 近畿大学文芸学部10周年記念誌「文芸学部の10年」2000年、近畿大学文芸学部、4頁。
- 17 同誌、5頁。
- 18 網澤満昭「文芸学部二十年を回顧して」近畿大学文芸学研究所紀要『混沌』6号、2009年、二五頁以下。
- 19 「文芸学部の10年」一二五頁。設立当初のカリキュラムを表1に示した。
- 20 同書、一二六頁。
- 21 参照。網澤満昭、前掲論文。
- 22 アリストテレス『ニコマコス倫理学上』高田三郎訳、岩波文庫、二二〇頁以下。
- 23 さらに芸術学科では、昨夏に医学部と連携して附属病院で院内作品展示会「Hartプロジェクト」を開催した。Hartとは、Hospital Artsを略した造語である。ホスピタル・アメニティというコンセプトの下、外来患者さんや入院患者さんの目や心を和ませるため学生諸君の作品展示が行われたのである。また、一昨年と昨年の三月に、「Arto八尾」において、芸術学科の教員と学生によって「Arto八尾教室」が開催された。





芸術学科・造形美術専攻

必修科目	関連科目
<p>芸術図学概論 造形学概論 色彩学概論 彫刻学概論 工芸学概論</p>	<p>美術史 美術概論 美術概論 美術概論 美術概論</p>
<p>美術図学概論 造形学概論 色彩学概論 彫刻学概論 工芸学概論</p>	<p>美術史 美術概論 美術概論 美術概論 美術概論</p>
<p>美術図学概論 造形学概論 色彩学概論 彫刻学概論 工芸学概論</p>	<p>美術史 美術概論 美術概論 美術概論 美術概論</p>

文化学科

必修科目	関連科目
<p>文化概論 文化概論 文化概論 文化概論 文化概論</p>	<p>文化概論 文化概論 文化概論 文化概論 文化概論</p>
<p>文化概論 文化概論 文化概論 文化概論 文化概論</p>	<p>文化概論 文化概論 文化概論 文化概論 文化概論</p>
<p>文化概論 文化概論 文化概論 文化概論 文化概論</p>	<p>文化概論 文化概論 文化概論 文化概論 文化概論</p>